人と業績

佐伯定胤老師

――法隆寺の故和上を偲んで――

富貴原章信

一

老師は慶応三年六月二十五日、大和国、法隆寺村で生れた。父の名は喜平、母は幾枝であった。三子あり、師はその次男、俗名を格次郎という。

明治八年、九歳のころ、同族の佐伯覚栄師のもとに入寺、翌年に覚栄師が遷化したため、その法兄にあたる佐伯寛応師にあづけられ、お経の素読を習った。同じ年、管主、千早定朝師を戒師として、受戒得度することになった。戒名を覚円房定胤という。塔中、宗源寺、楓実賢師のもとで、佛書などの学習を始めた。

そしてその頃、廃佛毀釈が全国的に盛んで、奈良、興福寺の五重塔が売却されるというウワサがあった。法隆寺も窮乏状態におちいり、寺宝をいろいろ献上して、宮内省より壹万円を下賜されることになったが、それは十二の頃であった。また寺門を維持するため、西院伽藍の廻廊に売店を開くことを許していたが、たまたま、その西側より出火する騒ぎがおこり、そういう出店を禁止することとなった。フェノロサが岡倉天心とともに来寺、東院夢殿の秘佛、

即ち救世観音をひらかしめたのは、明治十七年、十八の頃であった。

同じ年、京都、清水寺の園部忍慶師につれられ、東山、泉涌寺、佐伯旭雅師のもとに入門、倶舎、唯識などを学習することになった。これは旭雅師、五十七の頃である。明治二十年、旭雅師が高野山におもむき、倶舎論を講じたことがある。諸宗の弟子とともに師に随って登山した。初め无量寿院に止住し、後に般若院にうつるという。この間、真言宗の学徒と、大いに交遊したことはいうまでもない。

明治二十四年、二十五のとき、旭雅和上はその一月、六十四をもって遷化された。そこで泉涌寺、雲龍院において倶舎論を、また清水寺において初学者のため、百法問答抄を講じたという。後に奈良の興福寺にうつり、これを続講することになったが、さらに法隆寺にかえり、塔中、宗源寺のうちに勧学院をひらき、同法の学徒のために講義をつづけた。これが明治二十六年で、この当時の講義の草案が、唯識三性及五重唯識観講義案として残るのである。また同じ頃、倶舎論玄談なる一書を著した。私蔵、写本の奥書には、

已上ハ故和上（旭雅）玄談ト、信海海応両先徳ノ玄談トヲ取捨シ、間マ愚考ヲ加ヘ之ヲ録シ以テ講ノ便ニ備フ

明治二十四年十月六日　於京都東山泉涌寺雲龍院、因講本論草之了

南京法隆学問寺　応理末資　覚円房定胤誌

明治二十五年三月第二日　於東山清水寺延明院之偶居、養痾中、施朱点校之了

覚円房

とある。このように唯識、倶舎などの講義が始められた。その後、明治三十二年、三十三のとき、管主、千早定朝師が示寂したため、同三十六年、三十七のとき管主に就任、さらに寺門の経営にあたることになった。そしてこの寺門の経営には、老朽し荒廃した佛像、佛具、それに佛堂の修理という、大事業が眼前にひかえていた。そして聖徳太子、千三百年御忌の法会を厳修するということもあった。明治三十六年、三十七のとき、まづ西院伽藍の中門（飛鳥）、

また大正四年、四十九のとき、南大門（足利）の修理をおわった。

法隆寺には徳川時代このかた、檀家というものがなかった。それゆえに千三百年御忌をつとめるため、まづそれの奉讃会を結成せねばならなかった。明治四十二年の頃より、しばしば上京し、高楠順次郎、高嶋米峰、黒板勝美、正木直彦などの諸氏に謀り、奉讃会の結成に尽力した。伝えるところによれば、その頃、和上は黄色にそめた木綿のころもをまとい、つねに上京されていたという。大正六年、五十一のとき、徳川頼倫侯爵を奉讃会の会長に推戴し、それより四年後、大正十年、さらに久邇宮をその総裁に奉戴して、いよいよ千三百年御忌の法要を厳修することになった。これは一生一度の大法要であったが、このとき和上は五十五になっていた。

その後、昭和八年、六十七のころ、三経院西室（鎌倉）の修理が完成したのであるが、しかし法隆寺には、なお急ぎ修理されねばならぬ、多くの堂塔伽藍がのこっていた。そこでその翌年に、貴衆両院の議員、二十余名、文部省の係官などを招待し、寺中全般の現状を、くまなく視察してもらうことになった。そしてその翌年に、この寺の修理事業をすすめるため、文部省のうちに、法隆寺国宝保存事業部と、その保存協議会が設置せられ、いよいよ本格的な修理事業が、国費をもって始められた。

昭和十年、六十九のとき、西院の東大門（天平）、食堂（天平）、細殿（鎌倉）、東院の礼堂（足利）、鐘楼（天平）などの修理が完成し、翌年に西円堂（天平）、その翌年に地蔵堂（足利）、さらにその翌年に大講堂（藤原）、そしてその翌年（昭和十四年）には、東院の夢殿（天平）と、その廻廊（足利）を、昭和十五年に東院の南大門（足利）、昭和十七年に北宝院本堂（足利）と、その表門（足利）、昭和十八年には伝法堂（天平）、舎利殿絵殿（鎌倉）、昭和二十三年に聖霊院（鎌倉）、昭和二十九年に金堂、五重塔（飛鳥）の修理がおわり、ようやくその落慶法要がつとめられたが、これは和上示寂の二年後であった。ここに昭和九年このかた二十年の歳月を費して、ようやく修理の大事業は終ったのである。これによって、和上はまづ大事業家であったことが知られる。

題法隆寺国宝保存工事報告書という一詩がある。

堪嗟聖跡歴年荒　　なげくに堪えたり聖跡歴年の荒
監史督工修故堂　　史を監し工を督し故堂を修す
落慶奏功輪奐美　　落慶奏功したり輪奐の美
長伝国宝掲霊光　　長く国宝を伝え霊光を掲げん

西院、食堂修理のとき、そのうちから破損した吉祥天像（天平）が発見せられ、それを修理することになったが、たまたまその靴をとると、足の指がその爪まで、みごとに彫りだされていた。和上はこれを眺めて、昔の人は目に見えない部分まで、丹念に仕上げているが、今の人は目に見えるところでも、なるべく手がかからぬよう仕上げるのである。これでは、とうてい永遠にのこるようなものはできない。そのように言われたことが思いだされる。

昭和二十四年一月、八十三のとき、金堂が炎上し、十二面の壁画は惜しいことに損焼した。和上の七言絶句がある。

巳丑正月念六日朝失火
炎金堂　賦遣悶々之情

学人忘汲信泉清　　学人は汲むを忘れたり信泉の清なるを
徒弄戯論心自盲　　徒らに戯論を弄んで心は自ら盲たり
失火一朝災聖殿　　火を失し一朝にして聖殿を災す
胸懐豈忍惨嗟情　　胸懐、豈に惨嗟の情に忍びんや

それより数年前のこと、壁画模写の事業が始められた頃、和上と雑談したことが思出される。そしてその雑談のうちで、和上は金堂壁画の模写を、してもらいたくないと云われた。壁画はつくられたもの、諸行は無常である。その命がつきたならば、必ず滅びる。そういうものを学者先生や画伯達は、あれやこれや、いじりまわし、かえって命を

短かくするのでなかろうか、吐きだすように、つぶやかれた。そしてその生命を短かくするようなことが、現実に起ったのである。和上はそれが現実に起ったとき、自身の清浄な信水が足らぬからであると懺悔された。

二

明治二十六年、法隆寺に勧学院が開設されてこのかた、昭和十九年、院生がことごとく出征して休講となるまで、およそ五十余年の間、唯識論、倶舎論などの講義がつづけられた。休講となってからも、何とかそれを再開したいと念願されていた。時事所感という一詩がある。

法隆学問寺中僧　　法隆学問寺の中に僧あり
道統綿々掲法燈　　道統は綿々たり法燈を掲ぐ
講論漸衰如日没　　講論は漸く衰え日の没するが如し
奮然努力再将興　　奮然と努力して再びまさに興さんとす

しかるに、この日没にはついに夜明がなかった。ただしこの佛道の伝統は、今日では奈良、薬師寺の長老、橋本凝胤師によって承けつがれている。

そして和上の唯識論の講義には、唯識述記が併せ講読されたことは云うまでもない。唯識述記は、玄奘三蔵が唯識論を訳出したとき、自ら印度で習得してきた学識にしたがって、これを講述したのである。そのような講述を玄奘の弟子、慈恩が筆受しておいたものが、即ち唯識述記である。唯識論を研究するには、どうしても述記を読まなくてはならぬが、しかしこの書は難解である。和上はその一字一句を綿密に読まれていった。これは国訳一切経のうち、唯識述記の和訳とその注釈（後半欠）（昭和十三年）をみるならば、明かに知ることができよう。

唯識論を研究するには、ただ唯識述記をよむだけでは充分でない。そしてこれを補うものが、慈恩の唯識枢要であ

るが、しかしこれは唯識論の文々句々を解釈するのではない。まづ唯識論のうち問題となる本文をあげ、その文について、述記にはない委しい解釈がみられる。それゆえに、その文が唯識論、何巻の何丁にあるのか、また述記では何巻の何丁に、その論文の注釈がみられるのか、そういうことが解らなくては、枢要の注釈を研究するのに、甚しい不便がある。和上の枢要には、そういう丁づけが克明になされている。また枢要の難解な文句について、処々に朱注が見られることは云うまでもない。

唯識論の注釈には、唯識述記の他に、さらに唯識論の西明疏、その弟子、道証の唯識論要集、同慧観疏、同玄範疏など、六家の注釈があったというが、しかしその解釈は、必ずしも慈恩のそれに一致しない。それゆえに、それらの解釈が間違っていることを、明かにしなければ、慈恩の解釈が正しいことにならぬ。それゆえに、これを明かにするために作られたのが、慈恩の弟子、慧沼の唯識了義灯であるが、この書も難解である。

それにこの書もまた前の枢要に同じく、唯識論の文々句々を解釈するのではない。それゆえに、その一節の文が、唯識論、何巻の何丁にあるのか、またその文に対する述記の注釈は、何巻の何丁にあるのか、それらのことが知られぬときは、この書の研究に甚しい不便がある。和上の了義灯には、それについて一々朱の書入れがみられ、またそのうち難解な文句にも、それぞれ朱注が施されるのである。国訳一切経のうち唯識了義灯の拙訳、あるいはその注釈などは、だいたい和上の手沢本によることは云うまでもない。

前記の如く、唯識述記は難解の書である。そのうち特に難解の文句については、後にいろいろ異った解釈が、簇出する恐れがある。それゆえに、そういう異義の簇出をふせぐため、それらの文句を、正しく解釈しておくことが必要である。このような必要に応じて作られたのが、慧沼の弟子、智周の唯識演秘である。それゆえに、この書もまた前の了義灯のように、述記の文々句々に対する注釈ではなく、ある一部分の注釈である。それで、その述記の文句は何巻の何丁にあるのか、そのことが知られるならば、極めて便利であるが、和上の手沢本をみると、それが一々書入れ

られるのである。それに演秘の文句に対する和上の注釈が、随処に見られる。

およそ以上において、いかに和上が唯識論、唯識述記、枢要、了義灯、それに演秘などを精読されていたか、充分に知られるであろう。これら和上の手沢本は、現に法隆寺に遺っているはずである。そしてこれらの論疏に説かれることは、ただ本文と本文との行間に、書入れられた注釈だけでは、とうてい理解しがたい所が多い。そういう部分は、別に義図を作って理解すべきであるが、和上は、そういう義図を丹念につくり、それが十数巻の書冊となって残るのである。おそらくこれ等は、いまでも整理されないままであろうが、もしこれが整理せられ出版されることになれば、学界の益するところ多大であろう。

そして和上が精読されていた唯識論の注釈に、さらに唯識同学抄がある。唯識論、唯識述記、枢要、了義灯、それに演秘などには、随処に問題となるところがある。そういう問題について、古来、種々なる論義が行われた。そのような論義の草案、即ち論草が、わが国で鎌倉時代に、唯識論の第一巻より第十巻にいたる順序にしたがい、千二百あまり編集されたものが、即ち唯識同学抄である。この同学抄について、いまの論題は本論の何巻何丁にあるのか、あるいは述記などの何巻何丁にあるのか、克明にその丁付けが記入されるのである。それに述記、枢要、了義灯、演秘、そして同学抄などにおいて、木板の印刷に誤字が多く、とうてい、そのままで読まれぬところがある。これらがすべて訂正されていることは云うまでもない。

このように唯識論とその注疏の講読は、五十余年の間に、何回か繰返されたのであるが、そういう講読の成果が、昭和十五年、七十四の頃、新導、成唯識論、二巻となって出版された。それは元禄板、成唯識論より、その導注において若干の増加があり、また沈玄明の唯識論後序、索引などが加えられているが、その他に、ほとんど変るところはない。旭雅本の唯識論には、多くの冠注がみられるが、これらはすべて省略されたのである。

そしてこの出版には、十数年の年月と、多大の印刷費が必要であった。唯識論、十巻のうちには、十二校、十三校

の校正を重ねたものがあり、したがって印刷屋からの苦情もたえなかった。また出版費には浄財の寄進があったことは、その奥書に記されたとおりである。そしてその原稿の制作は、唯識述記、枢要、了義灯、それに演秘などの原稿の制作と、同時に行われ、したがって後者の原稿もまた逐次、組版、印刷されるはずであったが、しかし戦争激化のためか、あるいは和上の示寂のためか、いまだ実現のはこびに至らぬ。私もまたこの出版事業には、少しばかり因縁があったので、その思出はつきない。

三

唯識論の講読とともに、さらに和上には倶舎論の講読があった。これも何回か繰返えされたであろうが、昭和八年の頃、京都、法蔵館より倶舎論の注釈、即ち光記宝疏（元禄板）の板木が、法隆寺に寄進された。それに大阪の紙問屋、奥田藤兵衛氏の浄施があり、光記、宝疏それぞれ二十部が新しく手摺にされることになった。そして元禄板の宝疏では、周知の如く、その第十二巻は欠本であるが、大正の初頃、石山寺の経蔵において、藤原古写の光記宝疏が発見せられ、そのうちに、宝疏の第十二巻もまた存在していた。

それで法隆寺では、新しく第十二巻の板木をおこし、併せ印刷することになった。私もその新しく印刷された一部を頂き、いまもなお書架におさめられている。このように、新しく印刷された光記宝疏によって、倶舎論の講読が始められた。しかるにこの元禄板の光記宝疏のうちには、誤字が至るところにある。これを訂正しなくては、とうてい正しく理解することができない。和上がこれを訂正されていたこと無論であるが、前に昭和二年、六十一の頃、大正大蔵経の出版にあたり、法隆寺がその第四校合所（唯識倶舎古抄本）となったので、このとき石山本によって、すでに光記宝疏の訂正はおわっていた。

このように倶舎論の講読には、光記宝疏が併せ講読されたことは云うまでもない。そしてその講読の方法は、ほと

んど唯識論のそれに変るところはなかった。それゆえに今日でも、和上が朱を加えられた倶舎論と光宝二記、それに多くの義図などが、法隆寺の書庫に残っているはずである。ただし倶舎論においては、円暉の頌疏、湛慧の指要抄、普寂の要解、あるいは林常の法義など、しばしば参照されていた。しかるにその普寂には唯識論略疏、唯識述記纂解などの注釈もあるが、しかしこれらは全く参照されなかった。おそらくこれは普寂の見解が、述記などの解釈に一致しないからであろう。和上に倶舎論玄談の著があったことは、すでに前記のとおりである。

四

明治三十六年、和上が三十七の頃（このとき管主職をひきうけた）太子三経の講讃が、夏安居として始められた。これは年々、五月十六日より八月十五日にいたる一夏九旬の講会である。法隆寺において三経の講讃が、いつ頃はじめられたか明かではない。伝えるところによれば、貞観（八五九――八七六）の頃、この寺に道詮律師があり、東院の夢殿を復興し、太子三経の講讃を行なったという。現にその坐像が夢殿にまつられているが、その晩年には福貴（平群の山奥）の草庵に隠棲し、そこから十二キロ余の道を、夏安居の間、毎日、往復したという。

そしてその山道は、山村の福貴から龍田川の右岸にそって下り、龍田村で橋をわたり、さらに法隆寺にいたるのである。しかるに、ある年のこと、六月十四日に豪雨があり、龍田川が氾濫した。おそらく今日は講会はなかろうと、寺側で思っていたのに、午後になって道詮律師は、漸く寺にたどりつかれた。そういう故事にならって、今日でも六月十四日にかぎり、午後に講会が始められるのである。このような口伝が今日まで残っていること、そのことに、いうにいわれぬ貴いものが、うかがわれよう。

その後、鎌倉の初頃、解脱上人がこの寺に来て、釈迦念佛会を修せられた。現にこの寺の一角に、解脱坊という地名が残るのである。その弟子に璋円という人があった。この寺に三経講讃が始められ、その学頭になったという。西

室（にしむろ）の南妻に三経院という佛堂がある。この佛堂の建立は寛喜三年（一二三一）であるが、（別当記）、このような三経院の建立は、璋円の三経講讃にむすびつけて考えられよう。そして寛喜三年より十年前は、承久三年であり、この年は太子の六百回御忌にあたるのである。太子の三経を講讃する三経院は、あるいは太子六百回御忌の紀念として、建てられたのかも知れない。

そしてこの太子三経の講讃は、明治三十六年に始められてから、和上示寂に至るまで続けられたが、安居講経と題する一詩がある。

聖躅千年修養庭　　聖躅は千年修養の庭なり
九旬一夏講三経　　九旬一夏をもって三経を講ず
慈雲含潤沃春草　　慈雲は潤を含み春草を沃す
枯槁四生玄導寧　　枯槁の四生は玄かに導れてやすし

そしてそういう講讃の成果は、三経の経文とその義疏を会合する、昭和会本、三経義疏として出版された。その第一は、昭和十二年、七十一の頃、出版された昭和会本、維摩経義疏である。この出版には私も校正の手伝をしたおぼえがある。その翌々年に、昭和会本、勝鬘経義疏が発行された。またこの寺には、宝治（一二四七―一二四八）板、勝鬘経義疏の板木がある。この宝治板の勝鬘義疏が、昭和十五年に手摺をもって発行せられた。

つぎに出版さるべきは法華経義疏である。昭和十八年、七十七のころ、日夜、その出版に苦慮されていたが、その頃、時局はいよいよ切迫し、どうしても果されなかった。その後、終戦となってからも、なかなか実現されず、ついに和上の示寂をむかえた。昭和会本、法華経義疏（和訓）は和上示寂の翌年に出版、その百ヵ日に霊前にそなえられた。これより前、昭和二年、六十一の頃、御草本、法華義疏の影印版が印行された。

このように太子、三経義疏の出版は完成をみたのであるが、なお和上には勝鬘経講讃の著がある。これは佛教奉仕

会によって昭和十四年、七十三の頃に出版せられた。また法隆寺には嘉禎（一二三五―一二三七）板、十七条憲法の板木がある。昭和二十二年、八十一の頃、これに「聖徳太子の十七条憲法について」という解説をつけて印行せられた。これより前、昭和十五年、七十四のころ、聖徳太子憲法玄恵注抄が、奥田正造氏の編集によって出版されたが、この書にもまた和上の意向が、加わっていたことは云うまでもない。そして玄恵は鎌倉の終頃、初めて朱子学を学習した人という。

五

明治二十六年、勧学院が開設されてから、大正七年にいたるまで、およそ二十五年の間に、和上の教をうけた人が、一八〇名あまりとなった。それで同窓会が結成せられ、この年、五十二の頃、その発会式が行われた。そしてその同窓生のうちに、臼杵祖山、生桑完明、木辺孝慈、沢木興道、保坂玉泉、山田玉田、岸信宏、高畠寛我、大西良慶、佐伯良謙など諸師の名がみられる。このうちには、すでに故人となられた方もあるであろう。これより数年前に作られた一詩がある。

恭迎見真大師六百五十忌景
乃賦香偈伸其情

十地法雲行路難　　十地法雲の行路は難なり
不如軽掉願船安　　軽く掉さす願船の安きに如かず
大心深入一乗海　　大心は深く一乗海に入れり
四衆仰瞻愚禿鸞　　四衆は仰瞻す愚禿鸞

ここに一乗海とは悲願の一乗である。

大正十五年、六十のころ、東京大学文学部において、唯識三類境義の講義があった。そのときの感想を佐伯良謙師宛の端書に、

大学講義、段々進捗、来（二月）十三日にて終了可仕候、二時間講義、一時間質問応答致候、諸博士の珍奇なる、幼稚なる質問には、只驚き居申候、唯識は従来考へ居たる如き、単純なるものにあらず、中々難関なるものなりとの概念丈与へ申候、兎に角、何れも一生懸命に熱心に聴講申居候。

とある。そしてその翌年、昭和二年は和上華甲の年であった。その翌年、同窓会の諸師は法隆寺に参集し、華甲慶祝の宴をひらき、そしてその記念として、唯識三類境義本質私記を出版、和上に献呈することになった。この書は前に東大で行われた講義の草案に、さらに加筆されたものという。和上華甲の詩がある。

淵黙庵中華甲僧　　淵黙庵のうちに華甲の僧あり
身如寒石骨如氷　　身は寒石の如く骨は氷の如し
攸々淡々伴雲水　　攸々淡々として雲水を伴う
日向人間説上乗　　日に人間に向って上乗を説かん

ここに淵黙庵とあるは、和上の還暦記念として、神戸積徳会より寄進された茶室であって、いまも塔中、西園院のうちにある。和上は短身痩軀であった。そしてその心地といえば、行雲流水のようであって、世間的な野心も欲念も何もなかった。ただ願うところは、人間に向って上乗を説きたい、そういうことばかりであった。和上の説法は決して雄弁でなかったが、醇々として説き去り説き来り、それが延々とつづくのである。勧学院の講義などは、毎日毎日午前中、三時間でも四時間でもつづけられた。正午をつげる西円堂の鐘が、殷々とひびくのである。柿喰へばの子規が聞いた、あの鐘である。

僧正の講釈ながし春の鐘

昭和六年三月、私は大谷大学を卒業したが、その頃、学校騒動があったために、先生は総辞職されてしまった。さらに研究をつづけたいものにとって、これは大なる当惑であった。やむなく郷里の大先輩、住田智見先生に相談におもむいたところ、唯識の学習をつづけたいなら、法隆寺にいくがよい。法隆寺には唯識の第一人者、佐伯和上がおられる。私も和上をよく存じ上げているので、すぐに紹介状をかくから、これをもって出かけるようにと云われ、五月の初旬、それをもって出かけたのである。いよいよ初対面のとき、私の頭は長髪であった。側近の人にその髪を切るようにすすめられ、門前の理髪店で、さっぱりと切りおとし、それから和上に初めてお目にかかったことが、いまもなお忘れられぬ。

その後、昭和九年、六十八のころ、京都大学文学部において、「唯識学における文義聚集の過程」という講義があった。そして昭和十一年は七十の古稀である。同窓生、五十余名が遠近より来集し、慶祝の賀宴をはった。和上自寿の詩がある。

迎得古稀七十年　迎え得たり古稀の七十年
浪貪暖飽徒耽眠　浪に暖飽をむさぼり徒らに眠にふける
由来未報四恩恵　由来いまだ報ぜず四恩の恵
慚愧懺摩三宝前　慚愧懺摩す三宝の前

九歳で出家、釈尊がさだめられた規矩にしたがい、如法に修行されてきた和上である。旭雅和上の門に掛錫されていた頃、一日の休講があった。手許になかった書物を持参するため、夜を徹して寺に帰り、ついでに久濶を恕するため、その生家をたずねられた。すると、世俗の縁をたちきって修学中の身ではないか。佛弟子は俗門に入ってならぬ。そういう母の力づよい声が、家の中からひびいてきた。その声に励まされて踵をかえし、ただちに上洛されたという。法隆寺から、あまり遠くないところに、当麻という村がある。そこで源信僧都は生れられた。いま私はその母を思い

ださずにおられぬ。

それから令法久住のため、七十年の生命をささげられた。その間に実現された数々の成果については、すでに前記のとおりである。そしていま過ぎてきた七十年をかえりみると、いかにも夢の如し、幻の如しであった。和上は精進の人、自身を規制すること、極めて厳なる人であった。ふと和上の心地をかすめたもの、それはいままで徒らに、惰眠をむさぼっていたではないか。そういうことであった。晨朝の聖霊院（しようりよういん）のおつとめで、ふかく懺悔の頭をうなだれ、至心に合掌されている老和上のすがたは、まことに高潔清雅である。

古寺の紫衣のひじりや雪の朝

昭和十二年十一月、七十一のころ、大患をわずらって吐血、危篤かと報ぜられた。その頃、身辺があまりに多忙で、ついに身心過労のため、生死の境に彷徨されたのである。翌年、正月元旦の詩がある。

旧臘突如二豎煩　旧臘突如として二の豎煩
四支顦顇気昏々　四支は顦顇し気は昏々たり
不知履端門前景　知らず履端（元旦）門前の景
胡坐病床拝至尊　病床に胡坐して至尊を拝す

元旦をむかえたが、門前の景色をみることもできない。やむなく病床に趺坐して、一心に至尊の如来を礼拝するばかりであった。死に直面したものが、祈念せずにおられぬこと、それは永遠の生命に、直ちに参入したいということであった。永遠の生命は即ち至尊である。元旦の病床に、衰えた四肢をおこして趺坐し、一心に至尊を礼拝されている大徳のすがたには、心うたれるものがある。昭和十八年は和上喜寿の年である。元旦の口占がある。

老来七十七年春　老来、七十七年の春
意馬心猿戯六塵　意馬心猿は六塵に戯れる

未了空々如幻夢　　いまだ了せず空々にして幻夢の如くなることを
廓然何日見天真　　廓然として何の日にか天真を見ん

昭和九年の初夏、唯識論の講義が満講となった。そしてその記念として、門下生とともに、笠置山と海住山寺にある解脱上人の墓に参詣された。その途中、汽車の中で、しきりに和上は書見されていた。何の本かと、のぞいてみると、それは解脱上人の愚迷発心集であった。解脱上人は五十九年の一生をおわるとき、その一生が空しく明け、空しく暮れてしまったといわれる。わずかな善を修するにも、名聞のおもいにとらわれる。それだけではない。他人に対して自己批判を迫るときは、極めて厳重であるのに、自分は一向に自己批判しようとせず、まことに寛大である。これは、いったい、どういうことか。それは自身が愚迷の凡夫なる故であるといわれる。

和上は解脱上人に私淑されていた。和上もまた愚迷の凡夫なることを告白されている。これは前の古稀の詩にも、うかがわれるとおりであるが、このような心はまた太子の、共是凡夫耳とある心をうけるのである。もし、そうであれば、廓然大悟の日はないではないか。これが和上の深いなげきであった。しかるに、その和上には訪来観菊と題する五言の詩がある。

秋夜月明路　　秋夜に月明の路を
遙随北雁来　　遙かに北雁に随って来る
籬辺黄白菊　　籬の辺に黄白の菊あり
今暁幾花開　　今暁に幾くの花ひらくや

これは悠々自適の境地である。開いた菊花はわずかであったが、うるわしく開いていた。北雁は寒冷の地をさけて南国に来るという。寒冷の北地であれば、それは煩悩の氷雪に、とざされているであろう。そのような北地から、はるかに月明の路を、ここまで、たどりついた。あるいは今暁ひらいた黄菊白菊は、龍花三会の暁にひらくという、う

るわしい心花であったか知れない。昭和二十一年、八十に達せられた。失題という一詩がある。

八十修禅一老僧　　八十修禅の一老僧あり
跏趺石床骨如氷　　石床に跏趺して骨は氷の如し
脱然淵黙煙霞地　　脱然たり淵黙煙霞の地
点々掲焉無尽燈　　点々として掲げん無尽燈

八十といえば八十入滅で、まさに入滅されんとする釈尊を思わずにおられぬ。淵黙煙霞の地とは維摩、入不二法門の相である。超然として、そういう境地にある老僧であった。無尽灯は維摩の菩薩品にみられる。一の灯が二つとなり、二の灯が三つとなり、やがて無数の灯となるように、一人が法を聞き、これを次から次へと伝えるならば、限りなく佛法は流通する。これが点々として掲げん無尽灯である。

唯識三十頌には、三性を悟入することがとかれ、非不見此彼とある。此（円成実性）を（証）見ずして、彼（依他起性）を見るものにあらずである。摂大乗論には、これが蛇縄の喩をもってとかれる。これを和上は和歌によって、

非不見此彼
麻なりと見きはめぬれは（円成実性）
縄みるも（依他起性）
はらほう蛇と（遍計所執）
迷はさるらん

と伝えられた。これもまた一の無尽灯である。昭和二十三年、八十二のころ、観音菩薩念誦礼文という観音和讃が作られた。

観音薩埵念誦　私記

恭しく惟るに
観音妙智の力
　能く世間の苦を救ひ
神通力を具足して
　広く智方便を修め給ふ
　然れは則ち
常念恭敬の苔の庭には
　大悲施無畏の風
　清く七難三毒の塵を払ひ
恭敬礼拝の窓の前には
　大慈不唐捐の月
　朗かに二求両願の影を弄ふ
普門示現の故には
　三十三身の応現を垂れ
円通自在の故には
　十九説法の利生を施す
念々疑を生する勿れ
　観世音浄聖は
苦悩死厄に於て

能く依怙と作り給ふ
一切の功徳を具して
慈眼衆生を視そなはす
福聚ること海の如くおはします
是の故に応に頂礼すへし

これは法喜三昧、法悦三昧であった。南無救世観世音菩薩、南無救世観世音菩薩である。毎日、晨朝の勤行は、いまだ暁闇のあけやらぬ頃、聖霊院で始められた。それがこの観音念誦が作られた頃になると、いよいよ早くなったという。おそらくこの観音念誦を、毎朝、読誦されていたであろう。八十をすぎられた老僧である。寒中の佛堂はそこびえがする。うすぐらい佛堂の中で、短檠の灯がヂヂッともえる。それほど静かな佛堂で、白い真綿の頭巾を、頭からすっぽりかむり、手爐をかかえながら、朝づとめされている老和上のすがたが、いまも眼前にうかんでくる。

朝参の孤堂をたたく時雨かな

そして遷化の前年、春の頃より身体に異例を生じた。偶成と題する一詩がある。

八旬又五骨残朽　　八旬にして又五なり骨は残朽せり
歯落耳聾如木偶　　歯はおち耳は聾して木偶の如し
恬淡無心空寂地　　恬淡たり無心空寂の地
悠々物外一閑僧　　悠々として物外に一の閑僧あり

木偶で、ついに老醜をさらす身となったが、それでも心は無心の境に遊んでいた。終焉をきざむ音が、絶えまなく心耳にひびくのである。しかるに老和上は世俗に超然たるものがあった。そして世俗に超然たる一の閑僧は、さらに、そういう心境を、

春来三臥病　　春よりこのかた三臥の病あり
老骨抱深憂　　老骨は深憂をいだく
人世不可恃　　人の世は恃むべからず
嗚呼我事休　　あゝ我が事は休す

この一詩は無題である。独来独去の人世であった。すでに我が事が休すれば、サイナラ、アリガトであった。老朽長物死亦佳とうたわれている。昭和二十七年十一月九日、また病臥された。黄疸であったという。

黄色病痾身　　黄色の病痾の身なり
何時化白銀　　何の時にか白銀に化せん
尚如秋粟熟　　なお秋粟の熟するが如し
臥榻転艱辛　　榻(たふ、ベット)に臥してうたた艱辛たり

十一月二十三日、八十六年の生涯をとじ、安らかに遷化された。遺言など何もなかったという。